

写真= akihisa hirata architecture office



「Overlap House」の模型を囲む、街並みのスタディで撮影された外壁や看板などの写真と、「カラーベスト」のカットサンプル。街にはさまざまな色が存在しており、それに呼応するように、14色の「カラーベスト」がセレクトされた。「Overlap House」の屋根・外壁が物語るのは、南大塚の庶民的な街並みといえるだろう



写真=平林克己

平田晃久 [ひらた・あきひさ]

1971年大阪府生まれ。'97年京都大学大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年平田晃久建築設計事務所を設立。'15年より京都大学赴任。現在、京都大学教授。主な作品に「樹屋本店」(2006)、「sarugaku」(2008)、「Alp」(2010)、「Bloomberg Pavilion」(2011)、「kotoriku」(2014)、「太田市美術館・図書館」 「Tree-ness House」(2017)、「9h Projects」(2018-) などがある



自然と街並みに重なり合う外装

屋根材・カラーベスト発売60周年特別企画・第二弾

平田晃久 [平田晃久建築設計事務所] × カラーベスト [ケイミー]

編集制作= 建築知識 建物写真=阿野太一 デザイン=ThereThere

角地に立つ「Overlap House」。街並みに存在する色をランダムに組み合わせた「カラーベスト」の外壁が目を引き。「隣り合う建物の色合いが外壁面にも入り込んでいるかのようで、なおかつ庭の緑が透ちがっていて、建物が街並みに馴染んでいるかのように感じられます」(平田氏)。実際に使用されたのは「コロニアルガラス」から9色、「コロニアル遮熱ガラス」から5色^{※2}

に手づくり感があって、南大塚の街並みにマッチするものと、肯定的にとらえました。カラーバリエーションが豊富な点もいいですね」(平田氏)。

実際のデザインとしては、「Overlap House」の周囲にある建物の色調に合わせて、青系や緑系、茶系、黒系、白系といった14色の「カラーベスト」を、詳細なシミュレーションを経て、壁面ごとに微妙に組み合わせを変えながら混ぜ合わせている。さらに作業現場での職人の感覚も加味され、意図的な乱れが有機的な印象を与える外壁となった。張り方は千鳥張り。ただし、「既製品アルミサッシの位置に合わせて材料の割付けを行う」「出隅部に通常役物を用いず、現場で板金を加工して隠す」といった細部への徹底した配慮が、地面から街並み、空に向かって巻き上がるように続く、「カラーベスト」の美しいグラデーションをしつかりと引き立てている。

「カラーベスト」による

「Overlap House」での試みは、これからの時代の建材のあり方についての道標とも考えられる。平田氏は語る。

「私は、自然環境のような建築、を目指しています。自然には微妙かつ無限の差異があるのに対し、均質であることが重視される建材(工業製品)を用いてそうした差異を表現するのは容易ではありません。性能を担保することは当然として、同じような葉っぱはただでどちよとずつ違うカタチをしているとか、そうした差異をどのように表現するのか、これからの建材に求められること、だと考えています^{※1}。

「別のアプローチとしては、建材そのもので無理やり差異を表現するのではなく、つくり手側のほうで、「Overlap House」のように、複数の色を組み合わせることで差異をつくる、という方法もあります。そうすれば、建築がカタログのツギハギではなく、個性豊かなものになるのではないのでしょうか」。

「各階の庭の微気候に照らし合わせ、それぞれに適した植物を選んでいきます。風が強く、乾燥しがちな3階の庭には乾燥に強いものを、適度に影がある2階の庭にはアジサイなど日本の気候でよく生育するものを、湿度が高く光があまり届かない1階の庭には、シダ類など、ジャングルの下草をイメージしたものを、それぞれ植えました」(平田氏)。

こうした植物の多様性は、さまざまな要素(差異)が重なり合うという、「Overlap House」の重要な世界観と相通じるだろう。

その多様性は、外壁にも表れている。緑に包まれた「Overlap House」の存在感を際立たせているのは、その色彩豊かな外壁といっ

ても過言ではない。「カッコよさを求めると、建物のファサードは真っ白やメタリックになりがちですが、そうすると、周囲の環境から切り離された存在になってしまうおそれがあります。庶民的な戸建住宅が所狭しと立ち並ぶ、南大塚の街並みから感じられる雑多なノイズを、私は心地よいものとしてとらえていて、それを外壁に取り込もうと考えました。外壁の色をランダムに組み合わせることで、まるでカメラオンのように街並みに溶け込ませながらも、それでいて独特の存在感も醸し出すよう工夫しました」(平田氏)。

「Overlap House」の外壁に使用されたのは汎用的な化粧スレート。カラーベスト。という名前で広く知られ、2020年に発売60周年を迎えた、外壁にも使用可能な信頼性の高いケイミーの屋根材である。「一見何の変哲もない建材ですが、金属ほどにはミニマルすぎず、木目調の模様やギザギザの水切部も、逆

※2 「コロニアルガラス」からは「ガラス・ミッドナイトブルー」「ガラス・ラスティグリーン」「ガラス・プロヴァンスベージュ」「ガラス・アッシュグレイ」「ガラス・ビューブラック」「ガラス・パールグレイ」「ガラス・ウェザーグリーン」「ガラス・グラスブラウン」「ガラス・ボルドーレッド」、「コロニアル遮熱ガラス」からは「ガラス・クールオレンジ」「ガラス・クールホワイト」「ガラス・クールブルー」「ガラス・クールシルバー」「ガラス・クールグリーン」が採用された

※1 工業製品としての均一性と、自然素材のような差異を併せ持つ建材として、表面が白華した窯業系建材[SOLIDO](ケイミー)があり、2017年の発売以来、さまざまな用途の建物で数多く採用されている



3F

光と風が強い3階の庭は空気が乾燥しているため、メラレウカ(中央)など、乾燥に強い植物が選定された。空に近いこともあり、外壁の“カラーベスト”は青系や緑系の色を多めに配合



2F

2階の庭はまさに光井戸。適度に影があり、空気はやや湿りがちなので、ハイノキ(左)やカシワバアジサイ(右)などが植えこまれている。正面に見えるまだら模様の“カラーベスト”が窓に映り込み、内と外の境界を曖昧にしている



1F

1階は比較的光が届きにくい、多湿な環境。シダ類やアボカドなどを植え込み、ジャングルのような雰囲気とした。外壁の色は、地面や周りの建物の外壁との調和を図るために、茶系の色を多めに配合。板金の役物が表面から見えなくて、出隅部の納まりも美しい



動画視聴はこちらから

「Overlap House」で撮影された平田氏と建築家 永山祐子氏(永山祐子建築設計)との対話の1コマ。「建材は今後どうあればいいのか」について、平田氏は、一つひとつの表情が異なる葉に手をかけながら、均質性が求められる工業製品において、自然界に存在する差異を表現することの重要性に触れている

無数の差異がつくる「Overlap House」の多様性

「Overlap House」は複数のボイド、外部階段、スキップフロア、多種多様な植栽、露出した構造(鉄骨柱・デッキプレート)などの要素(差異)で構成されており、自然の多様性を感じさせる。もちろん、14色の“カラーベスト”を散りばめた外壁も同様だ。